

資料紹介 藤田遜の油彩画―「美協展」最初期の光彩―

野中耕介

はじめに

一九一四年（大正三）七月七日から十七日まで、佐賀市内の旧県会議事堂を会場に開催された第一回「佐賀美術協会展」（以下「美協展」）は、佐賀県内における本格的な美術展覧会の嚆矢である。^(註1) 洋画家久米桂一郎と岡田三郎助、そして東京美術学校（現東京藝術大学、以下美校）の佐賀県出身の卒業生らを中心に結成された「佐賀美術協会」（以下「美協」）が主催する美協展は、一九一四年以降、佐賀市内で年一回開催され、県内の美術振興の中心的役割を担う重要な存在となった。佐賀県内の近現代美術史は、この美協展を主軸として展開されたといっても過言ではない。

筆者は美協展の歴代出品者及び出品作品の調査研究をおこなっているが、二〇二三年（令和四）、美協創立時の会員の一人で、最初期の美協展に出品した藤田遜（ふじた・ゆずる）の油彩画作品が複数点発見され、そのうちの四点が佐賀県立美術館に寄贈された。これまで藤田の作品は、わずかに油彩画二点が確認されるのみであり、さらに彼の経歴についても、ほとんど不明のままであった。

本稿では洋画家藤田遜の新発見の油彩画と、現在までに判明している彼の経歴をあわせて紹介する。そして美協展への出品状況から、藤田の佐賀県内の近代美術史上における位置について、若干の考察を加えてみたい。

なお、本論に先立ち、藤田遜作品を搜索され、その閲覧と撮影の便宜を

はかっていたいた豊福保夫氏（画家、創元会会員、佐賀美術協会員、基山町在住）と、貴重な作品及び情報を御提供いただいた綿山和子氏、藤田正明氏、本山康子氏、高野敬一氏、高野龍介氏、鹿毛病院に感謝を申し上げます。また、本論中に掲載した藤田の略年譜は、豊福氏が制作されたものを基本とし、筆者が適宜加筆したものであることを付記しておく。

1 藤田遜の略歴について

藤田遜は一八八八年（明治二十一）五月二日、佐賀県三養基郡基山町園部黒目牛に藤田幸太郎、つねの長男として生まれる。当時の藤田家は一帯の地主であったという。彼は二十歳の年の一九〇八年（明治四十一）四月、東京美術学校豫備科に入学、同年の九月十一日から西洋画科本科に入学した。^(註2) 藤田の美校入学以前の経歴、修学状況は現在のところ不明である。洋画修学を志す契機となった出来事や人との出会いがあったと想像できるが、明らかではない。

藤田の前後に佐賀県から美校西洋画科に進学した人は陣内貞義（明治四十年卒）、北古賀順橘（明治四十三年卒）、中溝四郎（明治四十四年卒、同年逝去）、山口亮一（明治四十四年卒）、御厨純一、北島浅一（ともに明治四十五年卒）^(註3)らがいる。このうち在学時期が重なる山口、御厨、北島らと、藤田は佐賀県内で初の美術家によるグループ、美協の創設に参加した。

一九一三年（大正二）十月、東京上野の精養軒にて、佐賀出身の美術家たちが会合を開き、その席上で美協の創設と、佐賀市内で美術展覧会を開くことが決定された。現在、同会の趣意書が伝えられているが、そこに「世話人」として山口亮一、江島信一（佐賀出身、美校金工科選科、大正四年卒）とともに、藤田が名を連ねている。^{（註4）}そして翌一九一四年（大正三）三月に藤田は美校を卒業、七月に開かれた第一回美協展に油彩画と素描を出品している。藤田は図画教員志望であり、教員免状も取得していたはずだが、佐賀県内、また他県でも、彼が旧制中学校等の教壇に立った記録を発見できない。

藤田は美協展を発表の場とし、洋画家として活動しながら、一九一七年（大正六）三月、鹿毛キヨと結婚する。しかしその直後の七月五日に二十九歳で急逝する。死因についてもはっきりしないが、在学中から結核を患っており、それが悪化したためとか、流感によるものであるとかの伝聞があるという。^{（註5）}佐賀に生活の基盤を築き、いよいよ画家として、また図画教師として本格的に活動を開始する矢先のことであり、この青年画家の無念はいかばかりであったろうか。

2 藤田遜の油彩画作品

藤田の油彩画作品は、美校の卒業制作である《自画像》（大正三年三月、油彩、東京藝術大学大学美術館蔵）と、佐賀県内では《花》（大正時代、油彩・板 佐賀県立美術館蔵）が知られるのみであった。ここでは《花》と新発見のものとを合わせて十二点の油彩画について紹介する。なお新発見の各作品の題名については、いずれの作品も明確にしえないため、筆者

が命名したものであることを記しておく。

（1）裸婦―美校時代の習作

藤田の油彩による裸婦像が五点発見されたが、そのうち四点が佐賀県立美術館に寄贈された。それら四点について状態を見ると、支持体はカンヴァスで、いずれも木枠から外され丸めて保管されていた。カンヴァスには経年による劣化と、画面には保管時に付いたであろう折れや擦過傷が多数見られる。絵具層は一部剥がれが見られるものの、全体に固着状態は良好である。修復の必要を認めるが、現状からでも藤田が人体の基礎的なモデリングの技術を十分に習得していたことが認められよう。

図1 《座裸婦》（大正時代 58.8×44.7cm 油彩・カンヴァス 佐賀県立美術館蔵）

図2 《座裸婦（横顔）》（大正時代 71.5×59.7cm 油彩・カンヴァス 佐賀県立美術館蔵）

図5 《座裸婦（全身像）》（油彩・カンヴァス 個人蔵）

髪を結び上げ、ややうつむいて座るポーズと、斜め後ろから見た椅子に腰掛けるポーズの裸婦が描かれる。裸婦の肌は明るく着彩され、暗めの背景に明瞭に浮かび上がって見える。人体の陰影には褐色ではなく彩度を抑えた赤、緑等の有彩色が用いられている。絵具を比較的厚めに塗りつつ、やや赤みを差した肌の透明感がよく表現され、瑞々しい印象を受ける。図2 《座裸婦（横顔）》のカンヴァス裏面に、油彩で「西四・藤田」と署名があり、これにより本作が、彼が美校西洋画科四年次に描かれたことが分かる。おそらく一九一二年（明治四五・大正元）かその翌年かのことであり、西洋画科は三年以降で油彩による人体写生が課されるが、その授業作品であろう。この頃の西洋画科では三年次に藤島武二、四年次に黒田清輝が主に指導にあたっており、^{（註6）}藤田も彼らからこれら裸婦の講評を受けたであろう

う。なお図5《座裸婦(全身像)》は図2のヴァリエーションであり、ごく近い時期に制作されたと考えられる。

図3 《裸婦立像》(大正時代 44.5×33.5cm 油彩・カンヴァス 佐賀県立美術館蔵)

図4 《裸婦立像(後姿)》(大正時代 44.5×32.5cm 油彩・カンヴァス 佐賀県立美術館蔵)

裸婦半身をそれぞれ正面、背面から捉えた構図である。先の座裸婦に比べ描写の難易度が高い角度といえるが、陰影の変化を細やかに観察し、人体の量感と空間の奥行を的確に把握、描写している。図3《裸婦立像》のカンヴァス裏面中央に、薄くスタンプによる印字があり(図3・2)、内容からイギリス製のカンヴァスであると考えられる。

(2) 人物画及び風景画

以降の作品は、裸婦以外をモチーフにした油彩画である。

図6 《男性裸体》(大正時代 44.2×32.5cm 油彩・カンヴァス 個人蔵)

陰影は一連の裸婦像に比べより褐色を帯びている。本作も習作的な印象が強く、堅実な量感表現を追求しており、刻み込むようなタッチでモデリングがなされている。本作は自画像という可能性もあるが、東京藝術大学大学美術館に残る《自画像》と比較すると、顔立ちに似た部分はあるものの、明確ではない。

図7 《婦人像》(大正時代 44.5×32.5cm 油彩・カンヴァス 個人蔵)

庇髪を結び、大きな髪飾りと和服姿で屋外に佇む女性を描く。人物は逆光でとらえられ、背景に咲く花々は桜だろうか。一連の裸婦像に比してよりたつぷりとした筆の動き、大胆な色遣いから、習作や写生を超えた表現を志向する描きぶりである。降り注ぐ外光を描写しながら、陰影に有彩色を加える色彩感覚に、山口亮一や御厨純一らの作品に見られるような、外

光派―白馬会の画風の影響を見て取ることができよう。^(註7) また、本作は妻の鹿毛キヨの肖像であるとの予想もある。^(註8)

図8 《風景(雪景)》(大正時代 45.5×33.2cm 油彩・カンヴァス 個人蔵)

図9 《海岸の船》(大正時代 31.7×41.0cm 油彩・カンヴァス 個人蔵)

図10 《海岸風景》(大正時代 42.3×60.3cm 油彩・カンヴァス 個人蔵)

後述するが、当時の藤田は日本各地に取材した風景画もよく描いている。「海」と「雪」は藤田が好んだモチーフであったようで、未発見ながら複数の作品が確認できる。^(註9) 《風景(雪景)》は陰影の調子を細やかに観察し、静謐な印象ながら、速い運筆が画面に動きを与えている。人体作品とは違った伸びやかさがあり、藤田の画技、表現力の豊かさを静かに主張する佳品である。

《海岸の船》《海岸風景》はともに描かれた場所は未詳。全体に色調がやや暗く、《風景(雪景)》に比べると未完の作という印象がより強い。なお《海岸の船》はカンヴァス側面を見ると、寸法を切り縮めた形跡があり、元々はもう少し大判の作品であったことが分かる。

図11 《百合》(大正時代 60.7×49.7cm 油彩・カンヴァス 個人蔵)

図12 《花》(大正時代 22.1×15.6cm 油彩・板 佐賀県立美術館蔵)

《百合》は新たに発見された作品で、描写は写実的でやや生硬ながら、絵具層は厚みがあり、張りを感じさせる。また保護用のニスが画面に塗布されているが、藤田の他作品に同様の処理が施されているものがなく、おそらく画家本人によるものではないと判断する。

《花》は県内に残る唯一の藤田作品として知られていた。本作の支持体は板で、画面の一部の塗り残し箇所から板目が見えている。白色の地塗塗

料等が塗布されておらず、そのため全体の色彩が沈んだ調子に見えるが、これがかえって表現に深みを与えている印象がある。空間は遠近を明確に描き分けず、平面的かつ装飾的に処理されている。人物画や風景画には見られない手法であり、新たな造形への試行的な作品であるのかもしれない。

3 藤田遜と美協展

藤田の美校の在学期間は一九〇八年（明治四十一）から一九一四年（大正三）だが、この当時の日本の洋画壇の状況を概観すると、彼が美校に入学する前年、一九〇七年（明治四十）に第一回の文部省美術展覧会（文展）が開催され、それにとまなう白馬会の発展的な解散（一九一一年）と、その翌年の光風会の創設、そして二科会の発足と展覧会の開催（一九一四年）と、日本の洋画はアカデミズムの確立とさらなる展開、そして変革の只中にあつた。藤田は美校に学び、これらの動向の中心ほど近くに在ったといえるが、彼は山口亮一や御厨純一らと違って、末期の白馬会展や光風会展、文展に出品しておらず、東京で自作を世に問うた形跡がない。実質的に彼の画家としてのデビューは帰郷後の美協展であつた。おそらく彼は在学中からすでに、卒業後は帰郷し、故郷の美術振興と図画教育に身を捧げると固く決意していたのではないか。

一九一四年（大正三）に開かれた第一回美協展には、日本画計六七点（出品作家十名）、洋画（油彩画）計百五十七点（出品作家十四名）、工芸計七点（出品作家十四名）が出品された。そのうち、藤田は一人で計五十点もの油彩画と二点の素描を出品している。^{（註1）}これは出品作家の中でも抜きん出た数であり、第一回美協展の洋画部門の印象は、藤田の作品に負うとこ

ろが少なくなかつたのではないかと想像できる。そして、これら作品の大部分が美校在学時に描かれたものであることは疑いなく、さらに今回新発見の油彩画群も、ただちに特定はできないものの、出品作に含まれていたと考えられる。

藤田の出品作品のモチーフは風景、人物、静物とヴァリエーションに富むが、注目すべきは、裸婦像と思しき作品が出品されていたことである。とすればこれは、佐賀県内における洋画の裸婦の公開では最も早い記録である。^{（註12）}

美協は白馬会の創設会員で美校教授の久米、岡田を筆頭に、彼らの美校の教え子らによって創設された。すなわち美協の洋画は「新派」と称された白馬会系列の画家たちで主に構成されていたといえる。^{（註13）}同科に学んだ藤田もまた、白馬会には未出品であるものの、色彩やモチーフの選択等に白馬会の傾向を感じさせるところがあり、その画風の影響下にあつたと想像できよう。そして彼の作品群は、山口亮一らの作品とともに、そうした美校西洋画科―中央画壇の傾向を伝える重要な役割を果たしたと思われるのである。

さらに藤田の美校の同級、またその前後の学年には、萬鉄五郎、小出楢重、また藤田嗣治、牧野虎雄らがあり、洋画の新傾向が台頭してきた頃でもあり、藤田もまたその時代の空気を呼吸しながら、新派―白馬会的傾向の作風からさらに進んだ表現を志向していくことも、また想像できるのである。

むすび 知られざる佐賀の美術家たち

明治以降現在までにおける佐賀県内の美術展覧会、また図画（美術）教員等の調査を進めていくうちに、佐賀県内の「知られざる美術家」の名が少しずつ明らかになっている。また、今回の藤田遜の作品のように、こうした当館の研究情報がきっかけとなり、有力な情報が当館に寄せられることも度々である。今回の調査で、藤田遜の画は一定の水準を示し、地方画壇において指標となるだけの完成度を備えていることが確認できた。もし早世しなければ、藤田は山口亮一らと並んで、県内洋画壇と図画（美術）教育の発展を推進する重要な存在となつたはずである。

今後も新発見の作品が発掘され、考察される機会が増えてゆくことを期待したい。

【註】

- (1) 美協と美協展の創設及び草創期の様相については、松本誠一「大正期の佐賀美術協会」(『新郷土 三七八号』新郷土刊行協会、一九八〇年九月 一一―一四頁)及び拙稿「概説 佐賀美術協会とその展覧会「美協展」」(『佐賀美術協会の100年』(佐賀美術協会編、二〇一七年 二四―三五頁)を参照。
- (2) 藤田の生没年月日は遺族所蔵の戸籍の写しを、また美協の在学期間については、「東京美術学校近事」(『東京藝術大学百年史 東京美術学校編 第2巻』東京藝術大学、一九八七年)を参照した。
- (3) 『東京美術学校一覧 従大正六年 至大正七年』(東京美術学校、一九一八年)及び「東京美術学校同窓会 会員名簿 昭和十五年七月」(東京美術学校同窓会、一九四〇年七月)を参照した。
- (4) 趣意書「佐賀美術協会の創立に就いて」は初出不明ながら、美協の記念誌(『90回佐賀美術協会展記念誌』佐賀美術協会、二〇〇七年)で紹介されている。その内容は以下の通り。

由来佐賀の若い人たちは軍人や外交官ばかり憧れていたもので、久米、岡田先生も歎かれていたし、地方の文化向上のため、佐賀でも展覧会をとの声が数年前からあつたので、幸い両大先輩を持つ吾々郷土出身の美校生が集まって東京上野の某料亭で創立会を開いたのが大正二年十月の事である。而愈々展覧会を開くにしても、背景幕がなく、東京で開かない真夏の間だけ借りる事になり、七月、場所も旧県会議事堂を無料拝借という形でやる事になったのである。

世話人 江島信一

藤田 遜

山口亮一

- (5) 豊福保夫氏による藤田の遺族への聞き取り内容から。
 - (6) 「東京美術学校近事 6-8 明治四一年五月二九日」(『東京美術学校百年史 第2巻』第8節 明治四十一年)を参照した。
 - (7) 参考として山口亮一《鳥と子供》(図13)、御厨純一《木蔭》(図14)を示す。
 - (8) 豊福保夫氏による藤田の遺族への聞き取り内容から。
 - (9) 第一回から第四回的美協展出品目録中から抽出した藤田の出品作品一覧(参考1-4)による。
 - (10) 山口亮一と御厨純一の白馬会の展覧会出品歴は、展覧会図録『結成100年記念 白馬会―明治洋画の新風』(石橋財団ブリヂストン美術館他編、一九九六年)所収の「白馬会展 全13回の記録」(植野健造編)を参照した。
 - (11) (10) 参照。
 - (12) (参考1) 中に《裸の女》(目録番号17)と題した作品がある。
 - (13) 松本誠一「大正期の佐賀美術協会」(『新郷土 三七八号』新郷土刊行協会、一九八〇年九月 一一―一四頁)
- (のなか・こうすけ／佐賀県立博物館・佐賀県立美術館 学芸員)

藤田遜 略年譜

西暦	和暦	年齢	藤田遜 事象	佐賀美術協会と佐賀美術協会展 及び佐賀県関係の美術家に関する事象	東京美術学校及び 国内洋画壇に関する事象
1888	明治21	0	5月2日、藤田幸太郎、ツネの四男六女の長男として、基山町園部・黒目牛にて生まれる。		
1896	29	8			美校に西洋画科が創設され、9月11日から授業が始まる。 開設時の教員は嘱託教員 10月7日～11月30日、白馬会第1回展が開催される。
1906	39	18		山口亮一、東京美術学校西洋画科に入学。	
1907	40	19		長井智覚（日本画科）、御厨純一、北島浅一（共に西洋画科）の3名、豫備科の修了試験に合格し各本科に入学する。	10月25日～11月30日、第1回文展が開催される。審査委員に久米桂一郎、岡田三郎助。
1908	41	20	4月、東京美術学校豫備科に入学。（西洋画科志願） 7月、豫備科修了試験に合格し、9月11日から西洋画科本科に入学。		5月17日～6月14日、太平洋画会第6回展が開催。 10月15日～11月23日、第2回文部省美術展覧会が開催。
1909	42	21			4月16日～5月12日、白馬会第12回展が開催。 5月17日～6月14日、太平洋画会第6回展が開催。 10月15日～11月23日、第2回文展が開催。
1910	43	22		3月29日、北古賀順橘、美校西洋画科本科を卒業。	5月10日～6月20日、白馬会第13回展が開催。
1911	44	23		3月29日、山口亮一、中溝四郎、美校西洋画科本科を卒業。	3月8日、白馬会の総会が開かれ、解散を決議する。
1912	明治45 大正元	24		3月29日、御厨純一、北島浅一、美校西洋画科本科を卒業。 また長井智覚が美校日本画科本科を卒業。	3月、旧白馬会の会員7名が発起人となり、光風会が創立。 10月15日～11月3日、萬鉄五郎、岸田劉生、斎藤与里、高村光太郎らがヒュウザン会第1回展を開催する。
1913	2	25	美協設立趣意書「佐賀美術協会に就いて」、に山口亮一、江島信一とともに世話人として名を連ねる。	10月18日、東京上野・精養軒に美校教授であった岡田三郎助と久米桂一郎、そして美校の教え子らが集い、その席上、佐賀美術協会設立の話がなされる。参加者は山口亮一、御厨純一、北島浅一（美校西洋画科）、田雑五郎（美校彫金科）他、江島信一、武藤辰平、淵弘三、山崎善次郎らも同席した。ここで、美協の規約の骨子及び翌大正3年から佐賀で美術展覧会を開催することを決定された。	
1914	3	26	3月、美校を卒業。帰郷。 7月7日～17日、第1回の佐賀美術協会展に西洋画50点、素描2点の計52点を出品する。これらは第2室（西洋画）で一室に展示された。	7月7日～17日、佐賀市・県会議事堂を会場として第1回の佐賀美術協会展が開催される。会場は5室に分かれ日本画、西洋画、金工等計157点が展示された。	文展から洋画部門が分離し、二科会が結成される。 第1回二科展が東京で開催される。
1915	4	27	7月15日～19日、第2回の佐賀美術協会展に油彩画《雨後》を出品。		
1916	5	28	9月15日～19日、第3回の佐賀美術協会展に油彩画《三保海岸》を出品。		
1917	6	29	3月26日、鹿毛キヨと婚姻。 7月5日、急逝。 9月14日～18日、第4回の佐賀美術協会展に《習作 裸婦》他、計8点の油彩画が出品される。	9月1日、第4回佐賀美術協会展に第4室に「故藤田遜君遺作」として、遺作展示室が設けられた。計8点の油彩画が展示された。	
1931	昭和6			11月11日～15日、第回美協展（会場：佐賀市公会堂）に出品された下村源吾《裸婦》（油彩画）が、県特高課の申出により、画面の一部をパステルで塗りつぶす修正を余儀なくされる。	
1979	54		油彩画《花》が佐賀県立美術館に収蔵される。		
2017	平成29		5月26日～6月11日、第100回的美協展が開催される。 7月28日～9月3日、「明治維新150年プレ展覧会「山口亮一と佐賀美術協会の100年展」」（主催・会場：佐賀県立美術館 共催：佐賀美術協会）が開催される。油彩画《花》（佐賀県立美術館蔵）が展示される。	4月28日～6月11日、「佐賀大学と美協展」（主催・会場：佐賀大学美術館） 5月26日～6月11日、第100回的美協展が開催される。 7月28日、記念誌『佐賀美術協会の100年』（編集・発行：佐賀美術協会）が出版される。 7月28日～9月3日、「明治維新150年プレ展覧会「山口亮一と佐賀美術協会の100年展」」（主催・会場：佐賀県立美術館 共催：佐賀美術協会）が開催される。	
2022	令和3		12月10日～12日「基山町ふ・れ・あ・いフェスタ」（主催：基山町、会場：基山町役場）にて藤田遜の油彩画《裸婦》が公開される。		
2023	4		3月1日～31日、「藤田遜回顧展」（会場：基山町立図書館）が開催され、5点の油彩画が公開される。 《座裸婦》はじめ計4点の油彩画が佐賀県立美術館に収蔵される。		

・本略年譜は、豊福保夫氏（創元会会員、佐賀美術協会員）作成のものに、佐賀県立美術館学芸課・野中耕介が一部加筆した。

・略年譜中の略記は以下の通りである。

美協…佐賀美術協会、美協展…佐賀美術協会展、美校…東京美術学校、文展…文部省美術展覧会

・藤田遜の生没年については、遺族保管の戸籍の写しを確認した。

・「佐賀美術協会と佐賀美術協会展及び佐賀県関係の美術家に関する事象」は、主に以下の文献を参照した。
『佐賀美術協会の100年』（佐賀美術協会編、2017年）、『東京美術学校一覽 從大正六年 至大正七年』（東京美術学校、1918年）

・「東京美術学校及び国内洋画壇に関する事象」は、主に以下の文献を参照した。

『東京美術学校百年史 東京美術学校編 第2巻』（東京藝術大学、1987年）、展覧会図録『結成100年記念 白馬会—明治洋画の新风』（石橋財団ブリヂストン美術館他編、1996年）

(図版)



図1
藤田遜《座裸婦》
大正時代
58.8×44.7cm
油彩・カンヴァス マクリ
佐賀県立美術館蔵

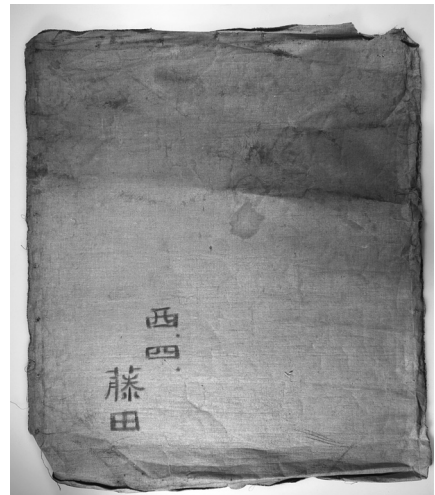


図2-2 《座裸婦(横顔)》の裏面

図2
藤田遜《座裸婦(横顔)》
大正時代
71.5×59.7cm
油彩・カンヴァス マクリ
佐賀県立美術館蔵



図3-2
《裸婦立像》の裏面

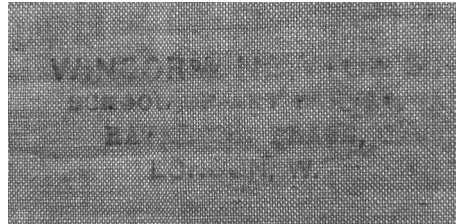


図3-3 中央スタンプ部分

図3
藤田遜《裸婦立像》
大正時代
44.5×33.5cm
油彩・カンヴァス マクリ
佐賀県立美術館蔵



図4
藤田遜
《裸婦立像(後姿)》
大正時代
44.5×32.5cm
油彩・カンヴァス マクリ
佐賀県立美術館蔵



図5 藤田遜《座裸婦(全身像)》
大正時代 油彩・カンヴァス
個人蔵

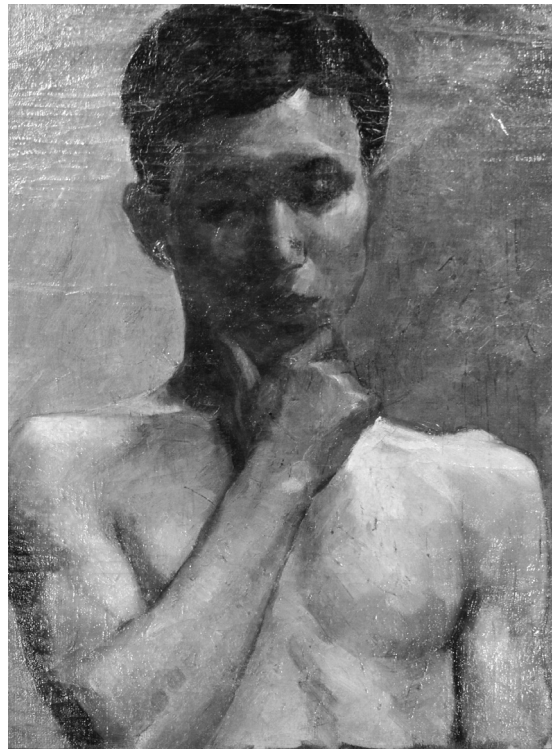


図6 藤田遜《男性裸体》
大正時代 44.2×32.5cm 油彩・カンヴァス
個人蔵



図7 藤田遜《婦人像》
大正時代 44.5×32.5cm 油彩・カンヴァス
個人蔵

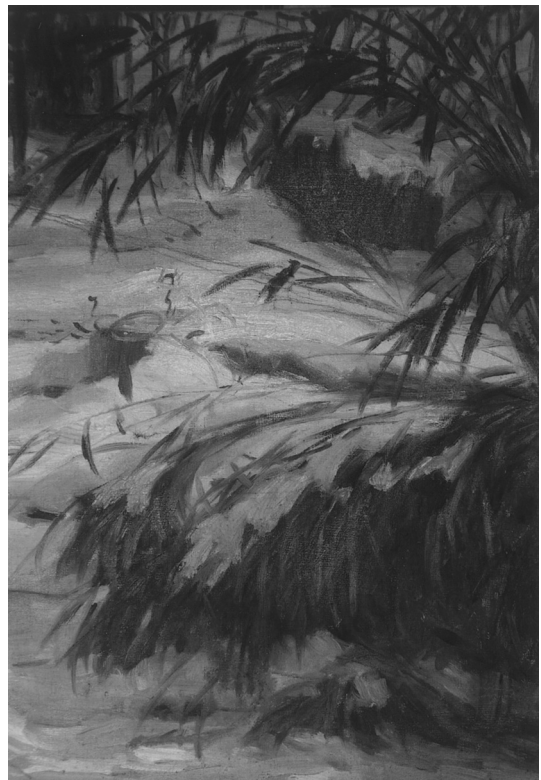


図8 藤田遜《風景(雪景)》
大正時代 45.5×33.2cm 油彩・カンヴァス
個人蔵



図9 藤田遜《海岸の船》
大正時代 31.7×41.0cm 油彩・カンヴァス
個人蔵



図11 藤田遜《百合》
大正時代 60.7×49.7cm
油彩・カンヴァス
個人蔵



図10 藤田遜《海岸風景》
大正時代 42.3×60.3cm 油彩・カンヴァス
個人蔵



図12 藤田遜《花》
大正時代 22.1×15.6cm
油彩・板
佐賀県立美術館蔵



図13
山口亮一 《鳥と子供》
1921年
161.7×96.7cm
油彩・カンヴァス
佐賀県立美術館蔵



図14
御厨純一 《木蔭》
1913年 65.4×80.5cm
油彩・カンヴァス
佐賀県立美術館蔵

参考1 藤田遜 第1回佐賀美術協会展(大正3年)出品作品

番	目録番号	作品名	分類	当時の価格
1	二	棕櫚の林	洋画	50円
2	三	磯辺	洋画	10円
3	六	風の海	洋画	10円
4	一〇	雪(其一)	洋画	10円
5	十三	暮れんとする海	洋画	15円
6	十五	雪(其二)	洋画	5円
7	二七	光りたる海	洋画	15円
8	二八	雪笹	洋画	20円
9	二九	習作	洋画	非売品
10	三一	菊	洋画	5円
11	三七	放詞	洋画	5円
12	四〇	フレジャ	洋画	5円
13	六一	蹲躑	洋画	10円
14	六四	自画像	洋画	非売品
15	六六	山野の秋	洋画	10円
16	七〇	日暮里	洋画	10円
17	七一	夜景	洋画	10円
18	七三	帆船	洋画	5円
19	七五	炬燵	洋画	10円
20	七六	大島の夕照	洋画	20円
21	八〇	花	洋画	5円
22	八四	赤門の雪	洋画	15円
23	八八	北国の雪	洋画	非売品
24	八九	男の首	洋画	15円
25	九三	岸打つ波	洋画	10円
26	九八	蕾	洋画	20円
27	一〇三	黒潮	洋画	10円
28	一〇七	花壇	洋画	5円
29	一〇八	秋	洋画	5円
30	一一〇	つつじ	洋画	15円
31	一一五	赤き実	洋画	5円
32	一一七	裸の女	洋画	15円
33	一一八	馬	洋画	5円
34	一二〇	日の跡	洋画	10円
35	一二一	郊外	洋画	5円
36	一二六	磯	洋画	10円
37	一二七	ダリヤ	洋画	15円
38	一二九	黄昏	洋画	5円
39	一三一	松島付近	洋画	5円
40	一三三	吹雪	洋画	10円
41	一三四	東北の街	洋画	5円
42	一三五	雪の日	洋画	5円
43	一三八	表慶館ノ雪	洋画	5円
44	一四〇	百日紅	洋画	5円
45	一四二	雪(其三)	洋画	5円
46	一四三	呼子港	洋画	5円
47	一四五	北上の流	洋画	5円
48	一四七	雪(其四)	洋画	5円
49	一四九	静物	洋画	5円
50	一五〇	松島	洋画	5円
51	一五七	ララコン(木炭画)	素描	非売品
52	一五九	ナイト(木炭画)	素描	非売品

参考2 藤田遜 第2回佐賀美術協会展(大正4年)出品作品

番	目録番号	作品名	分類	当時の価格
1	七十	雨後	洋画	15円

参考3 藤田遜 第3回佐賀美術協会展(大正5年)出品作品

番	目録番号	作品名	分類	当時の価格
1	九三	三保海岸	洋画	非売品

参考4 藤田遜 第4回佐賀美術協会展(大正6年)出品作品
第4室(故藤田遜君遺作)

番	目録番号	作品名	分類	当時の価格
1	二	習作 裸体	洋画	—
2	三	北國の冬	洋画	—
3	六	大島の林	洋画	—
4	一〇	朝	洋画	—
5	十三	清水湾の浪	洋画	—
6	十五	自画像	洋画	—
7	二七	三保の釣橋	洋画	—
8	二八	静物	洋画	—